

学生のリフレクションを促す経験型実習 — 主体的に学ぶ力を育成するための取り組み —

深田 あきみ¹⁾, 新橋 澄子¹⁾, 下高原 理恵²⁾, 峰 和治²⁾, 李 慧瑛³⁾, 緒方 重光³⁾

要旨 看護基礎教育における臨地実習は、1人の患者を受持って、看護計画を立案、実施する方法が一般的である。しかし、看護展開の思考プロセスに重きをおかれることが多く、看護技術を修得する機会が減少している。また、看護師という職業の専門性や医療チームとしての認識などについて、実習中に体験していてもそれを学びとして認識する機会が少ないなどの課題が明らかになっている。このような背景からA看護学校では、経験型実習をベースとし、1人の患者を受け持つのではなく、複数の受持ち患者を看護師と共に看る実習方法を試行導入した。その結果、主体的に学ぶ力が伸びて、基礎看護技術の修得状況が改善し、リフレクションシートとビジョンゴールシートを併用することで、看護過程の理解が深まった。また、経験型実習における今後の課題として、学生のリフレクションを促す教員の指導スキルや学習プロセスの評価方法等が見えてきた。

キーワード: 臨地実習, 経験学習, リフレクション, ビジョンゴール

はじめに

平成23年度に厚生労働省が発表した看護教育の内容及方法に関する検討会報告書において、「看護の領域ごとに看護過程を中心に行う臨地実習が効果的であるかどうか検討が必要である。」「実際に対象者の看護を行うことよりも看護過程の思考プロセスに重きを置いて指導することが多く、技術等の実施する機会が減少している場合が見受けられる。」という指摘がなされている¹⁾。

従来、看護基礎教育における臨地実習は、1人の患者を受持って看護計画を立案・実施・評価する方法が一般的である²⁾。また、学生の思考過程に重きが置かれるため、基礎看護技術を修得する機会が減少しているとも言われてきた³⁾。さらに、看護師という職業の専門性や医療チームとしての認識などについて、実習中に体験していてもそれを学びとして認識する機会が少ない等の解決すべき事柄が先送りされている⁴⁾。

また、看護教育の在り方に関する検討会は、看護実践能力を育むための教育について答申している⁵⁾。看護実践能力とは、患者の健康問題に対して広い視野から柔軟に対応し主体的に行動できる能力、創造的な解決策を提案できる能力、他専門職と協働し、リーダーシップがとれる能力を指している。さらに、この能力は、「看護学実習によって身に付けることができる。」と述べられている。

多くの看護系大学では、この看護実践能力を育むために、看護学実習において、看護理論をベースに、患者の健康問題に関する情報を整理・分析し、看護計画の実施・評価という看護過程を展開している。しかし、看護過程を重視した看護実習は、「患者の特定の部分だけが過度に強調されて、看護の全体性や関係性を見失う」という問題も示されている⁶⁾。

このような背景のなかで、「経験から学ぶ=経験学習」

¹⁾ 豊穰学園金沢医療技術専門学校看護学科

²⁾ 鹿児島大学大学院医学総合研究科

³⁾ 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻臨床看護学講座
連絡先: 李慧瑛

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/Fax : 099-275-6760

E-mail: riheyon@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

という教育方法が注目されている。これまで看護基礎教育は、系統的に「理論 演習 実習」という流れであったが、順番を逆に「実習 演習 理論」というように教授方法を変えるものである。具体的には、日々の看護実習のなかでの出来事を教材化し、その問題解決を学生自らが探究する過程をとって、学生の個別の看護経験と学生の主体性を実習の中核に据える方法である⁷⁾。

経験学習において、リフレクティブネス（省察性）は、キー・コンピテンシーであるが、臨地実習の「振り返り」の学習効果や看護教員による振り返り支援に関するノウハウの共有が十分に進んでいるとはいえない⁸⁾。また、この教育方法に言及した看護研究は少なく、有効性も実証されていない。そこで、まず我が国の経験型実習教育の動向について文献研究し、次の段階として、経験型実習を試行導入した。その結果を踏まえて、この教育実践方法の有用性や問題点について検討し、今後の課題を明らかにすることを目的に調査を行った。

対象と方法

1. 調査期間

2014年2月

2. 対象

調査協力が承諾の得られたA看護学校3年次に在籍する学生

3. 調査方法

(a) 対象学生に調査の趣旨と方法を口頭と文書で説明し、同意を得た後、実習終了後に無記名の自記式質問紙票を配布した。回収箱に投函するようにして、留め置き法で調査を実施し、回収は看護教員が行った。

(b) 実習中に対象学生が記入する看護技術経験リストをもとに2012年度卒業生（従来の実習）と2013年度在籍生（経験型実習の導入）の基礎看護技術修得状況を比較した。

4. 調査内容

(a) 看護実践のリフレクションを行い看護行為の意味づけができたかを明らかにするために、看護実践能力と到達目標について、厚生労働省が提示している看護師に求められる看護実践能力から一部抜粋し、12項目の質問項目を作成した⁹⁾。主体的に学ぶ力については、6項目の質問（ビジョンゴールシートを意識しながら取り組めたか、学びたい内容を臨床指導者に伝えられたか、リフレクションシートを活用して日々の振り返りができたか、リフレクションシートで課題に取り組めたか、疑問はその場で質問し解決できた

か、病棟の特徴を踏まえて、学べる内容を事前に想定できたか）を作成した。「できた」「できなかった」「まあまあできた」のいずれかで評価するようにした。また、実習中に目指したい看護師に出会えたかについて自由記載で回答を求めた。

(b) 2010年度カリキュラム改正で示された経験しておかなければならない項目の修得状況；環境調整の技術、食事の援助、排泄援助の技術、活動・休息援助の技術、清潔・衣生活援助の技術、呼吸・循環を整える技術、褥瘡管理の技術、与薬の技術、救命救急処置の技術、症状・生体機能管理の技術、感染予防の技術、安全管理の技術、安楽確保の技術

看護技術経験リストは、上記13項目含まれるに141の看護技術について、必要な手順を記載しており、その一つ一つの手順を実施できたかを学生自身が記入するものである。記載内容を毎日、臨床指導者および教員が確認し、客観的なデータの質を保証した。

5. 複数の患者を受持つ経験型実習の概要

2013年度から導入した経験型実習における臨地実習指導方針のひとつは、「熟達した看護師の指導のもとに、様々な看護経験・診療の補助技術を学ぶ。」である。経験型実習では、個々が学生らしく考え、動けるようになるために、看護師と共に行動し、担当看護師が受け持っている患者への看護を一緒に実践する。

学生は、看護師と共に行動することで、「看護場面の優先順位はどのように決められているのか?」、「コ・メディカルといかに関わっているのか?」、「患者とのコミュニケーションにどんなスキルを使っているのか?」等について実践から学ぶことが要となる。加えて、看護過程の理解を深めるためのツールとして、「リフレクションシート」と一部改変した「ビジョンゴールシート」を併用した。

6. 用語の操作的定義

(a) 経験型実習

複雑な現象の中での経験を、学習者が自ら意味づけをしていくという学習形態をとる実習を経験型と呼ぶ。経験型実習教育では、学生は講義・演習で学んだ看護学の知識や技能をいったん忘れて、患者やその家族、医療従事者との関わり、臨床の中に完全に身を委ねる直接的経験が推奨される。その直接的経験から、学生が内省的経験を繰り返しながら学んでいくプロセスを援助していく方法である¹⁰⁾。

(b) リフレクションシート

リフレクションとは、「振り返り」、「内省的実践」、

■ 今日の実習の振り返り

氏名 金沢 豊子 H25年 2月6日

①実習で、学んだ事、重要だと思った事、印象に残った事、疑問に思った事、さらに考えたり調べたいと思った事を記入

受け持ち患者さんは、先月、術後の排便障害についての説明を受けていたが、その症状が持続するため、最近では退院しても変化した排便の状況とどのように折り合って職場復帰をしたらいのか悩んでいるようである。

退院して、「一番不安に思われることは何でしょうか?」との問いかけに対して、「時間は不規則だし、同僚や得意先の人たちと一緒にいる時間が多くて、気を遣って疲れると思います」「みんなに迷惑はかけたくない・・・」「できるかなぁ」と否定的なことを言われた。

そのときに、横で聞いていた妻の心配そうな表情が印象に残った。患者さんの話に耳を傾けながら、できるだけ元の生活に戻れるように支援していきたいと思った。

②実習で、何か気づいたり、感じたり、反省した点を記入

患者さんの否定的な発言を聞いて、なんと返答すべきか戸惑ってしまい、「そうですね・・・、不安ですよね」としか伝えられなかった。今後どのような援助が出来るか、患者の情報を再度見直し、整理して考えた。昨日、主治医から特徴的な排便症状は、時間経過とともに徐々に軽減することが説明されている。そこで、指示されている「脆弱化した肛門括約筋の回復のために骨盤底筋運動」を時間や内容を記載したパンフレットを作成して、一緒にやっていくことを提案しようと思う。

このことを前もって考えることができていたら、今日のような発言があった時にも戸惑うことなく、患者に接することが出来たと思う。状況を理解して先を見据えた援助を考えていくことが大切だと思った。また、妻の表情が気がかりなので、家族を含めたサポートを心がけたいと感じた。

図1 リフレクションシート例

■ ビジョンゴールシート

氏名 金沢 豊子

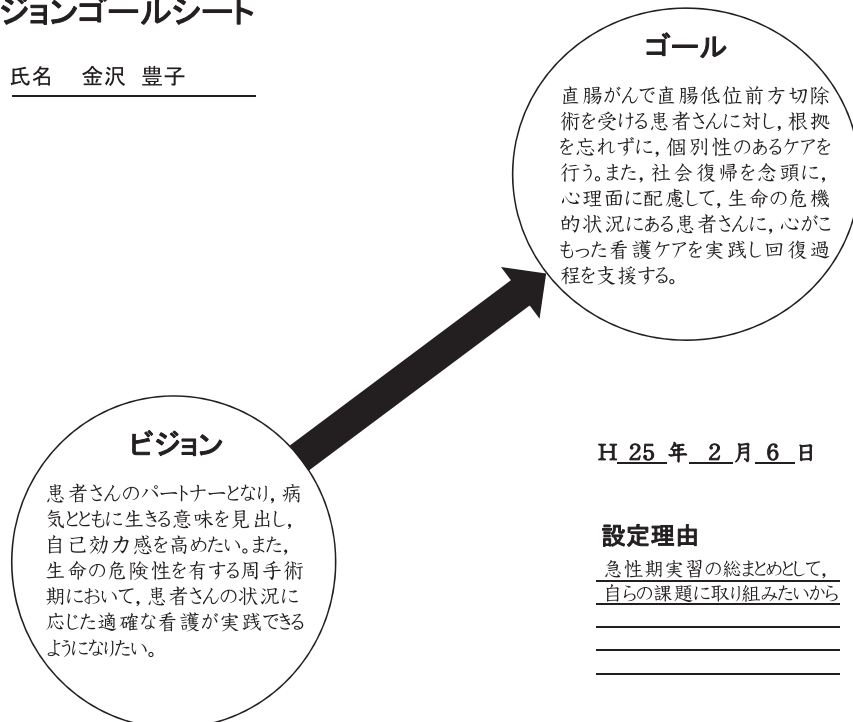


図2 ビジョンゴールシート例

「自ら気づく力」である。自分の問題を自ら気づき、それを自ら改善し変化させていく¹¹⁾。学生個々の能力に合わせたリフレクションを行い援助していくために、実習記録の用紙類を減らし、リフレクションシートに自己の学びを自由に記載していく方式をとる(図1)。

(c) ビジョンゴールシート

ビジョンゴールシートとは、「何のために、何をやり遂げたいのか」を明確化するために、ビジョン(願望)とゴール(目標)を書き込むものである¹²⁾。目標達成シートであり、実習開始前に学生に記入させて、到達目標へのプレをなくし、実習中に随時確認することで学習意欲を維持することを狙いとする(図2)。

7. 倫理的配慮

学内の倫理委員会の承認を得た後、対象学生には研究目的と方法、調査は無記名で公表されないこと、調査協力は自由意思であり調査協力しなくても成績等への不利益はないこと、データは調査以外には使用しないこと、参加後の撤回の自由、匿名性の保持について口頭で説明を行った。質問紙は回収箱投函により同意の意志表示とみなした。

また、看護技術経験リストについては、各年度の実習オリエンテーション時に匿名性の保持、調査協力は自由意思であることについて口頭で説明を行い、実習後データを調査に使用することについて書面にて同意を得た。

結 果

回答者は93名（回収率100%）であった。対象者の属性は、男子学生22名、女子学生71名である。

1. 主体的に学ぶ力

学生の90%が、「病棟の特徴を踏まえて学べる内容を事前に予測し臨んだか?」「ビジョンゴールシートを意識しながら取り組むことができたか?」「学びたい内容を指導者に伝えることができたか?」「疑問点について質問ができたか?」という質問に対し「できた」「ほぼできた」と回答した。しかし、20~30%学生が「リフレクションシートを活用した日々の学びの振り返り」や「リフレクションシート活用して課題に取り組む」ことが「できなかった」と答えていた（図3）。

2. 看護実践能力と到達目標

看護上の問題点を抽出する力がついたと答える学生は10%前後であり、対象者の社会的な看護問題に関しては「できた」と答えている学生は10%で、17%の学生が「できなかった」と答えていた（図4）。

3. 目指したい看護師像

目指したい看護師に出会えたと答えたものが76%、そう思わないと答えたものが14%、無回答が10%であった。

4. チーム医療への関心

経験型実習を通して、看護師と共に行動する実習の効果とし、チームの一員であることの自覚が育っていた。一人受持ちでは体験する機会の少ないが、他のスタッフとの連携を看護師と共に実践することが出来た。看護師との共に行動することで、その場で分からないことを質問したり、報告、連絡、相談もタイムリーに行っていた。

5. 看護技術体験の隔年比較

経験型実習導入後の2013年度の学生は、従来型実習の2012年度の学生に比較して、全項目において、見学・看護技術体験が増えており、とくに94項目中29項目は有意水準5%で統計的に有意であった。グリセリン浣腸、導尿、体位ドレナ-ジ、酸素ボンベの操作以外の技術は、ほぼ90~100%の学生が経験をしていた。

前年度に比べて伸び率の高いものとしては、経鼻・胃カテーテル経管栄養の注入が69%から85%、自然な排便を促す援助が58%から96%、口腔内・鼻腔内・気管内吸引34%から84%、基本的な包帯法の実施が、46%から83%と飛躍的に伸びていた。看護体験の低い項目は医療行為に関する項目であった（図5）。

考 察

1. 経験型実習導入後の看護技術経験率の変化

実習方針を大きく変えて行った結果、卒業時まで

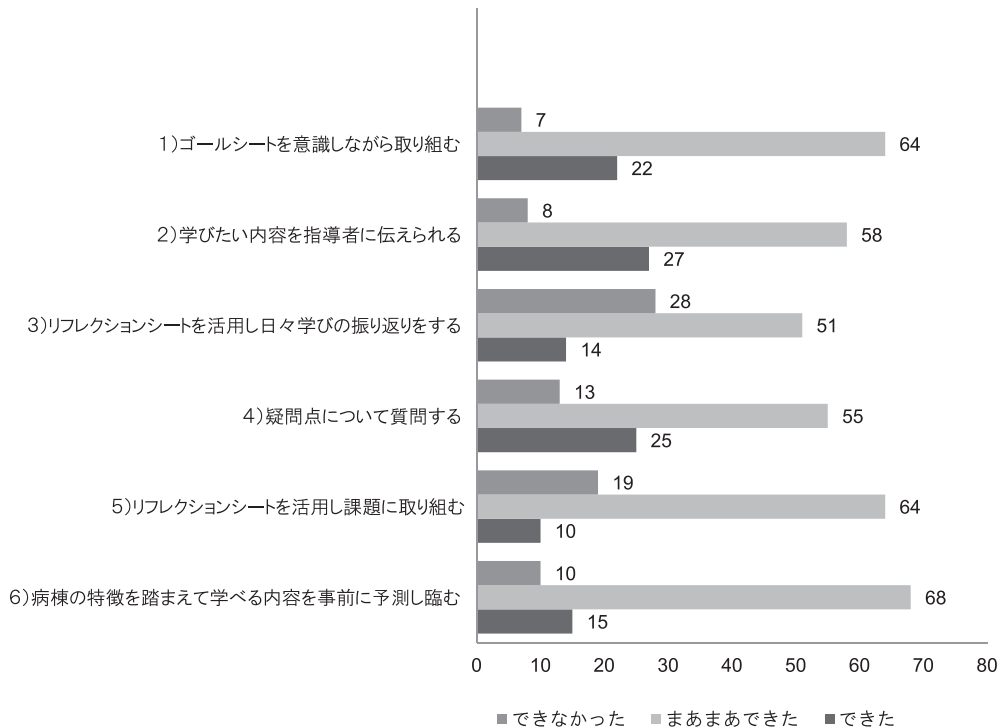


図3 主体的に学ぶ力 (n=93)

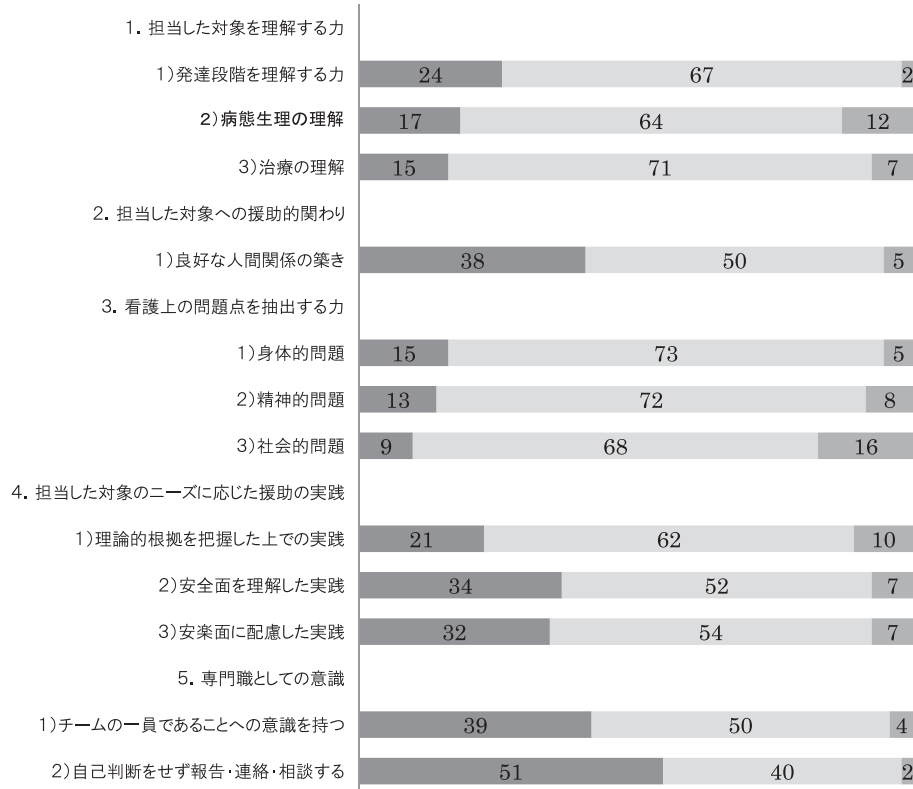
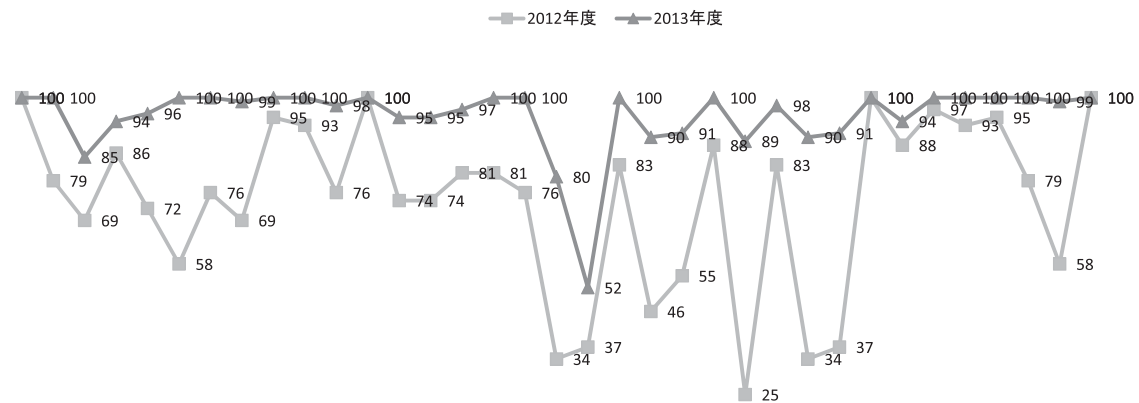


図4 看護実践能力と到達目標 (n=93)



環境調整	経管栄養の観察	経管栄養の注入	食生活指導	体液・電解質のアセスメント	自然な排便を促す援助	自然な排尿を促す援助	摘便	車椅子移送	ベットから車椅子への移送	ベットからストレッチャーへの移動	清拭	洗濯	臥床患者の洗髪	臥床患者の寝衣更换(輸液ラインあり)	酸素吸入を受けている患者の観察	温感法・冷感法	吸引	酸素ボンベの操作	褥瘡の観察	基本的な包帯法	創傷処置の無菌操作	経皮・外用薬投与後の観察	皮下・筋肉内・注射後の観察	緊急時の学生の対処行動理解	気道確保の技術	AED	バイタルサイン	採尿方法と取扱い	スタンダード・プリコーション	医療廃棄物の処理	インシデント・アクシデント発生時の報告	放射線暴露の防止	誤薬防止策	安楽な体位の保持	
環境調整	食事援助	排泄援助	活動・休息の援助	清潔・衣生活援助	呼吸・循環	褥瘡・創傷管理	与薬	救急救命	症状・生体機能	感染と防	安全	安楽																							

図5 看護技術体験の隔年比較 (数字は体験比率%)

ず見学やモデル人形ででも経験しておかなければならない看護技術体験が前年を上回っている。ひとりの患者を受持つ実習では、対象となる患者に必要な看護技術は実践できるが、それ以外については経験することが難しい。看護師と共に行動する実習としたことで、複数の患者に看護を提供する機会が増え、必然的に経験する看護技術が増加した。

医療の高度化、平均在院日数の短縮化、医療安全の確保の強化から、実習中に体験できる範囲や機会が限定され、必要な看護実践能力を身につけるのが困難な医療状況にある。試行導入した経験型実習方法は、このような現状においても多くの看護技術を体験でき、看護実践能力の育成に役立つと言える。

2. 看護実践のリフレクションと看護行為の意味づけ

多くの看護場を指導者と共に体験する経験型学習でも、看護過程の理解はできるということが明らかになった。これは、座学で看護理論を学び、演習、実習と進むこれまでの演繹的な実習方法ではなく、実際の経験（臨地実習）から自らの体験をもとに学んでいくという帰納的な学習方法でも、看護実践能力は獲得可能であることを示唆している。

また、これまでの実習方法では学ぶことが難しかった看護師という職業の専門性や医療チームとしての認識などについても、体験をもとに学ぶことが可能となる。優先順位をどのように決めるか、他のスタッフや医療者とどのように連携を取っているのかなどを体感することができる。そのために必須のツールが、リフレクションシートである。

しかし、今回の調査結果においては、リフレクションシートの活用について、「あまりできなかった」と回答した学生が30%と他の質問と比較しても多かった。結局、その学生たちは病棟の流れに沿って看護実践をしていただけで、教員の意図する「経験から学ぶ」というレベルまでは至っていなかったと推測される。リフレクションを行うためには、まず学生自身が自らの体験の中で、「何かに気づく感性を涵養する」ことが欠かせない。ここで、教員や臨床指導者は、学生との関わりの中で、「気づきを引き出す能力」が求められる。

そのためには、まず教員や指導者の関わりが重要となる。その理由について、ベナーらは次のように述べている¹³⁾。「気づかい (caring) は、人に『体験と行為』の可能性を作り出すのである。したがって気づかいは第一義的である (中略)。人に何事か・何者が大事に思われ、それがその人固有の関心対象となるのは気づかいはあるからで、もしそれがなければ、人は企図も関心も待たぬであろう。気づかいは通じてひとつの世界が樹立され、

その中に意味上の際立ちができて関心が生みだされる。人に動機付けと方向づけを与えるのはこうした関心に他ならない。」

つまり、教員は常に学生に「関心を持つことの重要性」や「意味づけの方略」を説いているが、臨床看護師や教員から“気づかいされている”体験を重ねることによって初めて「何かに気づく感性」が徐々に育つのではないかと思われる。従って教員は、学生の話をよく聞き、リフレクションシートを活用し、学生の気づきを引出すアプローチ方法を身につける必要がある。また、それと同時に実習の評価についても、行動主義から脱却しプロセスを評価する方法への変換を図らねばならない。

3. ビジョンゴールシートを活用した主体的に学ぶ力の向上

各領域の実習前に必ず自分でビジョンゴールシートを書き、「実習課題」や「願い」、「目標」を明確にして臨んだ結果、主体的に学ぶ力が伸びている。アンケート結果からも分かるように、ほとんどの学生がゴールシートを意識しながら実習に取り組んでおり、学びたい内容を指導者に伝えることが出来ていた。

鈴木は「意志ある学びを叶えるにはビジョン・ゴールをはっきり持つこと、そこに価値を見いだせること、やったことの成果や成長が見えること、そしてそれが他者に役立つとわかったときにやりがいを感じ、自ら成長しようとする。」と述べている。学生は自らの目標と課題を明確することで、日々の実習においてもどのように行動すべきか、自身での動機づけが可能となった¹⁴⁾。

また、シートに記録することで臨地実習指導者・教員それぞれが各学生と目標や課題を共有し、意識して取り組むことが可能となる。実習終了後の振り返りを含めた臨床指導者会でも、「学生の学びたいことが明確になり、指導しやすかった。」という臨床側からの意見があった。ビジョンゴールシートを用いることは、学生の目標、課題を明確にし、そのために何を学んだらよいかという問いを学生の中に持たせ、主体的に学ぶ姿勢を身につけることに有効であると言える。

まとめ

経験型学習について、以下の3点が明らかになった。

1. 看護師と共に行動し看護を実践する経験型学習でも、看護実践のリフレクションと看護行為の意味づけを行うことで、対象の理解や看護過程の理解は可能である。
2. 臨地実習に入る前にビジョン・ゴールを言語化・文章化をすることで、目的達成の動機付けをすることができ、学習効果があがる。
3. 看護実践のリフレクションと看護行為の意味づけを

行うためには、教員が学生の気づきを引出し、共に学習を進めていくスキルが必要である。

今後の課題

学生は、経験した現象を意味づけすることに困難に感じている。経験的実習は、感性的認識にとどまってしまっ
ては意味がないので、ツールとしてのリフレクションシートとビジョンゴールシートをどのように活用していくかを工夫しなければならない。また、教員には学生の経験を引出し、意味づけする過程への支援が求められ、学生の気づきを上手く引出すスキルが必要とされる。そこで、教員自身の指導力向上への対策も今後に残された問題である。

さらに、導入にあたっては、実習評価方法の転換が求められる。学生の意志ある学びを支援するために、評価視点の見直し、到達目標とビジョン・ゴールの設定、その到達に至る過程を重視した評価項目を考えなければならない。

文献

- 1) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書。2011
(<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q.html>)
- 2) 日本看護協会：日本看護協会調査研究報告 No.77
2006年看護教育基礎調査。2007
(www.nurse.or.jp/home/publication/seisaku/pdf/77.pdf)
- 3) 日本看護協会：新卒看護師の看護基本技術に関する実態調査。2002
- 4) 松清由美子，瀬川睦子，長田艶子：総合看護学実習における複数患者受け持ちによる実習効果 - 成人看護学領域における検討 - . 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要，2012；8：31-39
- 5) 文部科学省：看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標（看護学教育の在り方に関する検討会報告）。2004
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/15.htm)
- 6) 芥川清香，勝山吉章：看護学実習における経験型実習教育の検討 - 学生の安全意識を高めるための教育実践報告から - . 福岡大学人文論叢，2007；39(2)：309-325
- 7) 安酸史子：学生とともに作る臨地実習教育。看護教育，2000；41(10)：814-823
- 8) 和栗百恵：「ふりかえり」と学習 - 大学教育におけるふりかえり支援のために - . 国立教育政策研究所紀要，2010；139：85-100
- 9) 前掲1) p3-4
- 10) 安酸史子：経験型実習教育の考え方。Quality Nursing，1999；5(8)：4-12(568-576)
- 11) 東めぐみ：看護リフレクション入門 経験から学び新たな看護を創造する。初版，ライフサポート社，横浜，2012
- 12) 鈴木敏恵：ポートフォリオとプロジェクト学習。第1版，医学書院，東京，2011
- 13) パトリシアベナー，ジュディスルーベル著，難波卓志訳：現象学的人間論と看護。第1版，医学書院，東京，2000
- 14) 前掲12)

Experience-Based Learning that Facilitates Reflection in Students : An Approach for Fostering Self-Directed Learning Skills

Akimi Fukada¹⁾, Sumiko Shinbashi¹⁾, Rie Shimotakahara²⁾,
Kazuharu Mine²⁾, Hyeyong Lee³⁾, Shigemitsu Ogata³⁾

- 1) Independent School for Integrative medical Specialist in Kanazawa
- 2) Faculty of Neurology Gross Anatomy Section, Kagoshima University Graduate School
Medical and Dental Sciences
- 3) Department of Clinical Nursing, School of Health Science, Faculty of Medicine,
Kagoshima University

Address correspondence to: Hyeyong Lee
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, Japan
E-mail: riheyon@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

In clinical training during basic nursing education, each student is generally in charge of one patient and is expected to develop and implement a nursing plan. However, because the focus of training is often directed at simply the thinking processes in nursing practice, occasions to learn practical nursing skills have been declining. It has also been revealed that nursing students are provided with fewer opportunities to turn their experiences as experts and as a part of a medical team into actual recognition and learning. Against this background, nursing school A incorporated a trial training program rooted in experience-based learning, in which each nursing student cares for multiple patients together with nurses. This trial program enhanced self-directed learning skills and basic nursing skills among nursing students, and students' understanding of the nursing process was deepened by the combined use of reflection sheets and vision goal sheets. The findings of this study revealed future challenges in experience-based learning, such as improving teachers' skills for facilitating reflection in students and reviewing the evaluation method of learning processes.

Key words: nursing practice, experience-based learning, reflection, vision goal